

僕にも出来る人助け

京都府・京都市立嵯峨中学校 3年 児嶋 寛治

ユニセフという名前は誰もが一度は耳にしたことがあると思います。国際連合児童基金とって150以上の国で子ども達を守るために活動している国際機関の一つです。僕の家年末のイベントの一つにユニセフへの募金があります。毎年、名前シールと一緒に振り込み用紙が送られてきます。毎回その時のお財布事情で金額は違いますが、決して安いものではありません。でも、父も母もそのお金をもったいないと言いません。そのお金は世界のどこかで子どもの命を救うことになるかもしれないのです。勉強をサポートする手助けになっているかもしれません。

日本ではこのところ地震が頻発し、その度にたくさんの被災者が出ます。僕達のような子ども達も被災します。でも、遠くに住む僕達にお手伝いすることは出来ません。ボランティアで行ったとしても何の力にもなれず、むしろ邪魔になるに違いないのです。「何か力になりたい。」その気持ちを形にしたのが募金だと思います。

大きな災害が起こると僕の学校では生徒会のみんなが募金活動をします。問題は金額ではなく、助けたいという強い気持ちがあればそれで十分ではないでしょうか。今、手元にある100円が、募金することによって見知らぬ被災者の飲料水になるとしたら、そのお金は途端にイキイキしてくるよう感じられます。少額でもたくさんの人の募金が集まると大金になります。大規模な復興にも役立つかもしれません。

もちろん、お金が全てではありません。人の力は必要不可欠です。でも、「何かお手伝いしたい。」と思う人の全てが、時間的にも身体的にも余裕があるわけではありません。気持ちをお金に託すのは決して悪いことではないと思います。もちろん、募金をしたから知らんぷり。それでは何の意味もありません。自分が募金したことにより、その災害に関心を持ち、復興する姿からたくさんのお金を学ばなければならないと思います。災害への対策を考える良い機会にもなるでしょう。

僕も含め人は自分のこと以外には割と無頓着です。テレビや新聞で大きく取り上げられなくなったら、大きな災害ですら忘れがちです。でも、災害からの復興は長い年月が必要です。継続した支援が必要です。そのためにもす

ぐ忘れてはいけないのです。

教訓として心の中にとめておくために「何かした」記憶が必要です。僕の大事なお小遣いの中から100円でも募金したことによって、僕の中でその災害は特別なものになります。長く記憶にとどまることにもなります。たった100円がもたらす影響はとても大きいのです。多くを学び、災害の怖さを知る生きたお金です。

ユニセフに寄付するお金は、世界のつらい思いをする子ども達や飢餓に苦しむ子ども達の現状を知る良い授業料だと両親は言います。戦争の中で生きる子ども、干ばつや伝染病で苦しむ子ども。全ての子どもが僕達のように安全で清潔な環境で生きているわけではありません。余分な贅沢は出来なくても穏やかに暮らして教育を受けられることに感謝しなければいけないと思います。日々当たり前だと思うこの生活を恵まれていると感じることに寄付の意味があるのです。

無駄なお金と思う人もいるかもしれません。そのお金で美味しいモノを食べるといふ人もいます。良いことをしたつもりになってただの偽善だと思う人もいます。

それは人それぞれの考え方です。どれが良くてどれが悪いとは言えません。お金の使い方も行いもそれぞれの価値観で大きく変わってくるものです。でも僕は、毎年繰り返されるユニセフの募金によって自分の置かれた立場に感謝し、募金できることに幸せを感じます。美味しいモノで感じる幸せよりずっと心が温かくなるのです。

募金したことによって僕の家族は年末の忙しい時期に世界中の子ども達の現状に目を向ける機会を持つことができます。

そして、そのお金が遠く見知らぬ地で誰かの命を救い、子ども達の笑顔に繋がればと心から願うのです。